

見たところそこでは、なにも変わったことは起こっていない。ただ、空間と、そこにあしらわれたわずかばかりの物質の痕跡があるだけである。それ以上のことはなにも、起こっていない。こけおどしのようなイメージも、過剰な造形主義も、社会的なコンテキストも、そこからはなにも見いだすことはできない。

にもかかわらずそこには、ほかでもないその空間であり、そこに配置された最小限の物体からしか生まれないであろう、ある経験が存在している。たしかにそれは実体をもたないが、にもかかわらず、ほんのわずか移動されただけで失われてしまうような、かなり厳密なものであるように思える。

もっとも大きな変化とは、細部のわずかばかりの操作によって、全体がまるごと変容してしまうような状態をさす。彼の作品を体験するたびに、そのような印象を強く受けるのは、偶然ではないだろう。

見つめれば見つめるほど、そこではなにも起こっていない。にもかかわらずそのことを確認することを通じて、見るものは、みることそのものの変容の渦中に身をさらしているのである。

彼の作品を体験することは、どんなにうつろいやすく、かたちのないものであったとしても、われわれの生において、ひとつのクライマックスをなしている。